

課題名	73 ナバナの安定栽培技術確立		分類	①	
	3) ナバナの施肥法				
試験研究年次	63~1年(完了)				
I 目的 ナバナの基肥及び追肥における窒素施用量が生育・収量におよぼす影響について検討し栽培技術確立の資料とする。					
II 試験方法					
1 試験場所 豊前分場 1号圃					
2 供試品種 京築在来系統(ミチノクナタネ系)					
3 試験区の構成					
(1)基肥 (Nkg/10a) (2)追肥 (Nkg/10a)					
試験区名		基肥	追肥	試験区名	追肥
無窒素(0)		0	4 4 4	無窒素	0
基肥減量(9)		9	4 4 4	標準	3
標準(18)		18	4 4 4	増量	6
基肥増量(27)		27	4 4 4		
注)追肥期 1月11日					
注)追肥期 11月16日、12月26日、2月15日					
4 耕種概要					
(1)うね立て移植栽培					
(2)栽植様式 うね幅 150cm、条間 60cm、株間 35cm、2条千鳥植					
(3)播種日 9月1日					
(4)定植日 9月29日					
5 試験規模 1区 8㎡ 2区制					
III 主要成果の概要					
1 基肥窒素施用量は 1.8kg/10a程度が適量である。基肥を減量すると厳寒期の収量が減少する。増量すると1月に入ってからの収量はやや増加するが、11月の収穫物が徒長気味となり品質が劣る。					
2 追肥の窒素施用量の適量は 4~6 kg/10aの範囲にあるが、6kg/10a 程度の窒素施用量でも収穫物の日持ち性には、ほとんど差はない。追肥 0.3kg/10aでは、窒素不足に起因すると考えられる茎の赤色化や葉の黄化により品質が低下する。					
3 適正な追肥の施用時期は、土壌中無機態窒素含量で 5mg/100g乾土 以上を維持することを目安にする。この時の EC(1:5) は約 0.2msである。					
まとめ EC(1:5) で約 0.2ms以上維持するように追肥を施用する。特に厳寒期の窒素不足は収量を低下させるので注意する。					

IV 主要成果の具体的データ

第1表 基肥窒素施用量と収量

項目	10a 当たり 窒素施用量	63年 10月	11	12	1年 1	合計 (平均)
収 穫 本 本 数	0kg(標準)	1.0	0.8	3.4	3.4	8.6
	9 (減量)	1.0	3.3	5.4	4.3	14.0
	18 (標準)	1.0	6.5	4.0	7.7	19.2
	27 (増量)	1.0	5.0	4.9	8.6	19.5
1り 本 重 当 量 た (g)	0kg(標準)	18.4	16.9	18.6	12.7	(16.1)
	9 (減量)	18.1	10.2	14.8	13.0	(13.4)
	18 (標準)	19.8	9.2	15.2	14.3	(13.3)
	27 (増量)	18.6	9.8	15.1	14.8	(13.8)
1り 株 収 当 量 た (g)	0kg(標準)	18.4	13.5	63.1	43.3	138.3
	9 (減量)	18.1	33.7	80.0	55.7	187.5
	18 (標準)	19.8	59.8	60.6	115.1	255.3
	27 (増量)	18.6	48.9	74.2	127.7	269.4

第2表 基肥施用量と品質

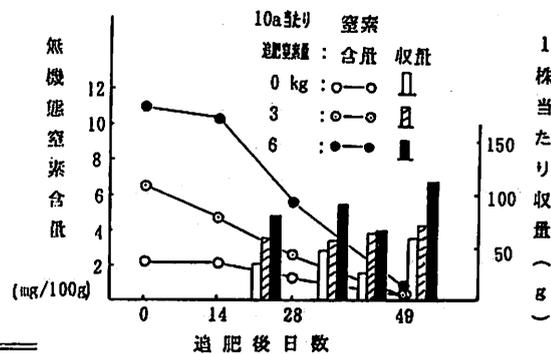
10a 当たり 窒素施用量	葉色	還元型 VC
0kg(標準)	1.32	mg% 128
9 (減量)	1.58	—
18 (標準)	1.57	125
27 (増量)	1.55	116

注) 調査日: 63年11月21日

第3表 追肥施用量と収量

10a 当たり窒 素施用量	1株 当 り 収 穫 本 数	1本 当 り 重 量	1株 当 り 重 量
kg	本	g	g
0	20.8	8.2	170
3	22.1	11.5	254
6	31.9	11.0	352

注) 調査: 1年2月



第1図 追肥施用量と収量及び土壌中の無機態窒素含量の変化(1年)

V 成果の評価と取扱上の留意点

ナバナ栽培基準作成上の資料とする。

VI 今後の研究上の問題点

VII 資料名

63~1年度 福岡県農業総合試験場 豊前分場 普通作物研究室 野菜試験成績書